

## 自由応募分科会 5 「ポスト・マハティール期のマレーシア政治」

司会 中村正志（アジア経済研究所）

報告 1 中村正志（アジア経済研究所）

報告 2 鷺田任邦（東洋大学）

報告 3 鈴木絢女（同志社大学）

討論 金子芳樹（獨協大学）

2003 年 10 月にマハティールが首相を退任した後、マレーシアの政治には重大な変化が生じている。本分科会では、政党と選挙、政治制度に焦点をあてて、ポスト・マハティール期にいかなる変化が生じたのかを示し、その要因を考察する。

国民戦線（BN）の一党連合優位体制が揺らぎ始めたことは、ポスト・マハティール期に生じた重要な政治的变化のひとつである。2008 年の第 12 回総選挙で野党が躍進し、主要 3 野党が人民連盟（PR）を結成したことにより、BN と PR が並び立つ二大政党連合制が成立した。2013 年の第 13 回総選挙では政権交代は実現しなかったものの、得票率では PR が BN を上回り、二大政党連合制が定着したかに見えた。ところがその後、PR 加盟政党間の対立が激化し、PR は 2015 年 6 月に瓦解した。政党システムを扱う報告では、こうした変遷、とりわけ 2013 年選挙以降の急激な変化を整理し、PR の瓦解にいたった要因を検討する。

政党システムの変化をもたらした根本要因は、2008 年選挙における投票行動の変化である。この選挙での野党の大躍進は事前に予想されていたものではなく、突然かつ急激な変化だったことから「政治的津波」と呼ばれた。選挙を扱う報告では、サーベイ・データなどを用いて、2008 年総選挙で野党が躍進した要因を探る。

開発独裁と呼ばれたマハティール政権が終わった後のマレーシアでは、民主化への期待が高まった。後継者のアブドラ・バダウィは期待に応える姿勢をみせたが、実質的な改革はできなかった。一方、2009 年に首相に就任したナジブ・ラザクは、デモを合法化し国内治安法を廃止するなど、短期間のうちにいくつもの法改正を実現する。ところがナジブも、2013 年総選挙後は引き締めへ転じた。政治制度改革を扱う報告では、マハティール後の政権が政治的自由化と反動のあいだを揺れ動くことになったメカニズムを示す。